

Ise-Japan Study Program

Liwen Tu

リーウェン・トゥ

University of Oxford

Ise and Japan Study Program is one of the best study programs I have ever attended. This program, based in Kogakkan University in Ise, is a fully-funded study program supported by Ise city. It is a well-organized program; we had lectures on different aspects of Japan, including its history, religion, language, literature, architecture, music and so forth. In three weeks' time, we had fostered a deeper understanding of Shinto religion, Ise city and the diversity of Japanese culture. Apart from those inspiring lectures, we also had field trips and experience classes. For example, we had the guided-tours to Ise Jingu, the Uji-Yamada town, futami, Ise business street, Kyoto and Nara. What is more, we also made our own fish cakes and tried on the clothes and outfits in Heian period. As for me, a DPhil student who is doing Japanese literature in the Heian period, I do appreciate this opportunity to get to know more about Japanese traditions.

According to *Nihon Shoki*, the goodness Amaterasu once said, "(Ise) is a secluded and pleasant land. In this land I wish to dwell." Therefore,

Ise is called as “the heart/soul of Japan”, mostly because of the Ise Jingu, where the goodness amaterasu was worshipped (in the Naiku). For this reason, Ise city is closely related to the Shinto religion, as the latter has penetrated into every aspect of Japanese daily life. During my stay in Ise, I was so impressed by people from the Ise, as they are dedicating themselves to protecting and popularizing Ise’s traditions.

Last but not least, the most unforgettable and precious part for me in this program is all those professors, lecturers, the staffs, volunteers and the other thirteen participants. We are such a diversity group and every one is focusing on different aspects of Japan, so we know a lot from each other. It is so hard to say goodbye after three weeks, we all wish it could be longer. I am so grateful that I get the chance to meet those scholars in Heian studies at Kogakkan university, as well as my classmates and those Japanese staffs and students’ volunteers, we have all become very good friends now.

I do hope this program will continue in the following years, it not only brings the students majoring in Japanese studies together, but also gives an insight on the development of Shinto and the role it has played in Japan, which from my perspective, is a very good viewpoint to understand Japan in a comprehensive way.

「伊勢」と日本スタディプログラム

リーウェン・トゥ 涂荔文

オックスフォード大学

この度の「伊勢」と日本スタディプログラムを参加させていただき、本当にありがとうございました。

皇學館大学で、日本歴史、宗教、文化、社会に関する色々な授業を受けました。そして、伊勢の歴史や宗教や文化だけではなく、日本全体についての理解を深めることができました。伊勢の魅力と日本文化の多様性についても学びました。

授業だけではなく、伊勢の神宮、宇治と山田の町、河崎、二見、大湊、斎宮、京都、奈良といった数多くの場所を見学しました。豊富な内容から多くの知識を学び、毎日が充実していました。私は現在、平安時代の文学について研究しているので、平安時代に関係する斎宮歴史博物館と時雨殿が非常に印象に残っています。また、伊勢の市民たちが一体となって、伊勢と日本の伝統を継承していることに感動しました。

最後にこのプログラムに参加したことで、多くの先生と仲間たちを出会うことができ、国際交流の魅力を体感することができました。私にとり、伊勢でのすべてが大切な思い出になりました。今後も皇學館大学との研究交流を続けていきたいし、また今回のメンバーでいつか会いたいと思います。

Ise-Japan Study Program

平安貴族の女性の姿 —伊勢斎王と藤原定子—

政治、女性と宗教
Liwen Tu 涂荔文

伊勢斎王

- ト定によって選ばれた未婚の内親王（天皇の皇女）
- 天皇の代わりに伊勢神宮に仕えた
- 天皇が譲位したり崩御したりするだけ都に戻る
ことができる
- 平安時代良子内親王と『春記』
- 南北朝時代に途絶した

齋宮歴史博物館 伊勢



齋宮歴史博物館 齋宮群行図



平安時代貴族の装束



野宮神社 嵐山

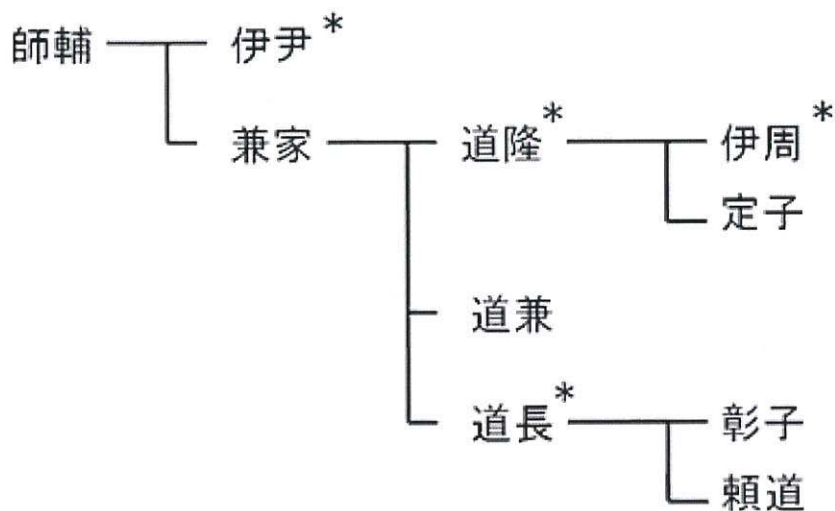


皇后藤原定子

藤原定子(977-1001) 関白内大臣藤原道隆の長女、一条天皇の皇后

- 『枕草子』の作者清少納言が仕えた女性。
- 藤原定子は天皇の寵愛厚く、栄華をきわめた生活は、『枕草子』によって知られる。
- 平安時代、藤原氏自己の政治的立場を強化するために娘たちを皇后に立てること
- 長徳元年(995年)道隆が死去すると、定子の兄・内大臣藤原伊周流放、定子有力な後盾を失った。
- 995年、定子出家
- 藤原道隆の弟、藤原道長が左大臣にとして、最高権力者となる。
- 996年、定子は第一子・脩子内親王を出産した

藤原道隆をめぐる系図(主な人物のみ、*は糖尿病を発症した人物)



出家した定子再入内

997年、一条天皇は再び定子を宮中に迎え入れた。

- 出家後の後の入内貴族たちの輦盛を反映して:
- 藤原実資は、『小右記』に「天下不甘心」の語を記している
- “参内、次参左府、申今日中宮(藤原定子)行啓事、可仰上卿不参之由、左府(藤原道長)於右大将宰相中将遊覽宇治、” “上達有所憚不参内、(藤原道長)似妨行啓事” (『小右記』)
- 藤原定子と武則天
- 藤原行成は、『権記』に、“江學士(大江匡衡)来語次云、白馬寺尼(武則天)入宮唐袖亡之由思皇后(藤原定子)入内々火之事引舊事歟”の語を記している
- 定子は(999年)11月7日、一条天皇の第一皇子・敦康親王を出産。天皇の喜びは大きかったが、藤原実資は、七日、中宮産男子、世云‘横川の皮仙’。
「出家らしからぬ出家」(倉本一宏)
- 藤原道長、“中宮(藤原定子)参内給、神事日如何?” “事與毎相違。”

藤原定子皇后と藤原彰子中宮：一帝二后

- 藤原道長はこのことで焦慮し、長女藤原彰子を一条天皇の皇后に立てることを望んだ。
- 1000年、藤原行成「當時所坐藤氏皇后東三條院、皇太后宮、中宮、皆依出家、無勤氏祀、職納之物、可充神事已有其數、然而入道之後不勸其事、雖帶后位、雖有納物我朝神國也、以神事可為先、中宮雖為正妃、已被出家入道、隨不勤神事、依有殊私之恩、無止職號、全納封戸也、重立妃為后、令掌氏祭可宜歟、如尸祿素飡之臣、徒資私用、空費公物、論之朝政、未有何益。」
- 当時、藤原氏からは東三条院詮子皇后宮・遵子(頼忠の娘で円融天皇の皇后)中宮・定子の3人が后として出ているが全て出家し、尼の身であった。このため藤原氏出身の皇后が行うことになっている大原野祭に奉仕する皇后が1人もおらず、神に対して申し訳が立たない。よってこの際皇后を増員し、祭りに奉仕すべきであるという論理を行成が編み出し、これによって東三条院や一条天皇を説得した。「一帝二后」
- 藤原定子皇后と藤原彰子中宮
- 大原野神社 大原野祭: 平安時代の中期には藤原氏の隆盛とともにその氏神として大きな地位を占め、天皇や皇后の崇敬も厚く、官祭である大原野祭には勅使が派遣されていた。また、伊勢の斎宮(いつきのみや)や加茂の斎院(いつきのいん)にならって当社にも斎女(いつきめ)がおかれていた。



藤原定子の死

- 1000年、定子は第二皇女・婁子内親王を出産した直後に崩御し「夜もすがら契りし事を忘れずは こひむ涙の色ぞゆかしき」書き残した
- 定子の崩御後、中関白家(藤原道隆家)は没落の一途をたどった。
- 藤原道長 全盛を築いた摂関政治
- 藤原道長 望月の歌「この世をば わが世とぞ思ふ 望月の 欠けたることも なしと思へば」

藤原彰子と藤原定子：賢后と武則天

- “可申賢后” 藤原実資『小右記』
- “今日、巳剋、一御子(藤原)始渡給中宮上御廬、先是會松容、上秦漢明帝令馬皇后愛養肅宗之故事、上然御氣色、至於今日遂此。
- 一条天皇の真意が定子所生の第一皇子・敦康親王にあったことを察していた上に自身も深い愛情を込めて養育していた彰子は、敦成親王の立太子を後押しした父を怨んだといわれる
- 藤原道長 金筆山埋経 “並主上、冷泉院、中宮(藤原彰子)、東等御為理趣卷分八卷



結論

- このふたつの例を見ると、平安中期は上層出身の女性が宗教的な役割を担っていたことも想像できた。
- しかし、藤原氏自己の政治的立場を強化するためその女性と宗教の関係を利用することもありました。



- ご清聴ありがとうございました。